冊子『ベルツ博士来日140年記念 Dr.Erwin von Bälz』より転載

Erwin von Bälz

ベルツの「遺言」、日本に「学術の樹」を

黒川 清 Kiyoshi Kurokawa
東京大学名誉教授、政策研究大学院大学名誉教授、日本医療政策機構代表理事

The first duty of a university is to teach wisdom, not trade; caracter, not technicalities.
Winston Churchill

1．はじめに

15世紀中ごろのグーテンベルグの活版印刷の発明による「情報の広がり」は、より多くの人たちに、考え、問いかけ、真実を求め、検証するという人間の特性を刺激し、宗教革命、ルネッサンスの近代科学、国民国家の誕生、産業革命、欧州列強の帝国主義、世界に広がる西欧の文明、科学と技術の進歩、植民地支配という西欧が圧倒する世界を構築した。この世界の流れに対して、日本は17世紀に「鎖国」で対応したが、200余年後に「幕藩体制」の終焉と「開国」を迎え、明治の時代となった。この長い「鎖国」を可能にしたのは日本の地政学的、地理的要因によるところが大きい。

明治新政府は岩倉使節団を欧米に送り、一方で多くの欧米人を招聘し、新しい国家の建設にまい進した。明治時代に来日した数多くのお雇い学者、エンジニアのなかでも、エルヴィン・フォン・ベルツ[1)]は、明治９年（1876年）から明治38年（1905年）の29年にわたり日本に滞在し、黎明期の東京大学（この原稿では「東大」とする）医学部で教鞭を執り、新しい時代の医師の育成に大きな貢献をした医師、医学者であり、日本の文化的側面の理解にも大きな貢献をした。ベルツは戸田花子と結婚、長男トクは11歳からドイツで教育を受け、第三帝国ドイツで最も著名な「日系ドイツ人」であったという[1)]。明治38年、日露衝突の日本海海戦に日本が勝利した5月29日のすぐ後、６月10日に横浜港を出発、長崎を経由して日本を離れた。

ベルツと同時期に東大を起点に外科学を中心に教えたユリウス・スクリバ医師もそのキャリアの20年を日本で過ごし、結婚し、日本で没した。この二人の胸像が東大医学図書館の横に、附属病院の方へ向かって立っている。

2. ベルツ滞在の時代、ベルツの日記、そして二つの講演

ベルツ滞在の29年間の日本は、近代西洋の大躍進を受けた当時の世界の情勢も踏まえて政府、産業、教育、軍備、医療、衛生などの近代化、独立国家の確立をめざしてまい進した。この間に欧米列強の進出を受けたアジアにあって、日本は朝鮮半島、満州への進出、さらに日清の衝突から日清戦争に勝利、日露戦争に突入する。日清戦争後の三国干渉にはベルツの母国ドイツの関与もあり、さらに欧州と米国の事情のさらなる変化もある。このような激動の時代の日本でのベルツは、医師という立場もあって、日本の皇室（宮内庁侍医も務めた）、貴人、政府高官、軍人、財界人、大学人など、広い交流を持ち、また医師として診療にあたることも多かった。さらに、諸国の駐日大使をはじめとする外交官との交流、また海外のニュースに触れる機会も多かった。

ベルツは日本の多くの素晴らしさを認識し、好きになっていく間でも、理由もなく「ひいき」になるまいという意識を持っていた。これらの時代背景を考えると、『ベルツの日記』（以下この原稿

ベルツの「遺言」、日本に「学術の樹」を

ではトク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳[2]のこととする）は、当時の日本と、複雑に変化していく西欧諸国の状況、視点などを考察するのに貴重な資料の一つである。この日記は、英、独、仏、露、米などと中国、朝鮮半島での日本の行動など、情報源は限られてはいるものの、日本をよく知るドイツの知識人、教養人、医師としての面目躍如であり、酒井シヅ氏の解説「エルウイン・ベルツのこと」とともに、広く日本の医師、医学関係者には読まれている。本冊子の「酒井寄稿」も参照されたい。

当時の国内外の事情やベルツとその家族の私的な判断を勘案した部分も含めて、『ベルツの日記』には長い欠損の部分もあり、これらを補完するような資料があれば、当時の日本の社会情勢にも意義のある所見も出てくるであろう。大いに意味のあることと期待したい。

『ベルツの日記』のなかでもベルツの二つの講演は、特に日本の医師、医学者の間ではよく知られ、引用されている。一つは明治34年（1901年）11月22日のベルツ日本在留25周年の記念祝賀会での講演であり、もう一つは翌年の明治35年４月２日、第一回日本聯合医学会の開会式の講演で、これは本冊子の「髙久寄稿」を参照されたい。

明治34年の講演の要旨は、今でも多くの機会に引用されている。それは今でも意義のある日本の「科学の精神」についての本質を突く内容だったからだ。私もこの講演の趣旨を、現在の日本の科学研究の「問題点」として紹介したことがある[3]

３．永井論文のインパクトと、この３年間の三つの重なる偶然

自治医科大学長の永井良三氏が2013年のベルツ賞50周年記念式典の機会におこなった講演をもとにした冊子[4]がある。本冊子と対（つい）になるものだ。これは私にとって目の覚めるインパクトがあった。『ベルツの日記』には出ていないドイツ語のベルツの日記の一部にも及んで考証したもので、そのいくつかの指摘が特に新鮮だったからだ。2015年４月、京都での日本医学会総会のある学会で、私の基調講演の最後に、この冊子を掲げて皆さんに紹介した。

同年11月にはペンシルベニア大学法科大学院で「アジアの大災害と補償の課題」の会議[5]が開催された。日本「憲政史上初めて」となった「国権の最高機関」とされる国会の立法による事故調査委員会[6]の委員長を務めた私は、福島原発事故について講演の招請を受けた。その機会にベルツの弟のひ孫のモーリッツ・ベルツ氏に出会うことになる（第１の偶然）。独フランクフルト・ゲーテ大学の日本法教授である。帰国後、永井氏に連絡すると、2016年の春、ドイツの内科学会で講演するという。さっそく３人のメールのやり取りが始まり、ベルツ氏と永井氏がドイツで会うことになる（第２の偶然）。そして、「ベルツと永井の対談、私の司会」の企画が実現し、2016年11月にベルツ来日140年を記念して『週刊医学界新聞』で「ベルツと永井の対談、私の司会」形式の鼎談[7]が実現した。この鼎談の発行日が、これも偶然なのだが、上に紹介したベルツ氏の明治34年11月22日の講演の日の115年目となるまさにその前日だった（第３の偶然）。本冊子の「永井寄稿」も参照されたい。

この短い対談での中心的なテーマは「学術の樹」という「科学する精神と概念」、これこそが上記の明治34年11月22日の講演でベルツが伝えたかった大事なメッセージだ。そして、115年前のベルツの指摘・教訓が、現在の日本で生かされているのか、これがこの鼎談で「最後にまとめた」私たちの問いかけだった。このような偶然が重なったことも、今回の「ベルツ来日140年」の冊子の背景にあった。

4、ベルツのメッセージ、「遺言」

このベルツの明治34年11月22日の講演での「科学」は、ドイツ語では「Wissenschaft」であり、菅沼の邦訳[2]は正しい。しかし、ベルツの受けた教育を考察すると、自然科学ばかりでない、今でいう教養教育「リベラルアーツ」を受けた背景での「科

学」なので、「学術」とでも表現した方が正しいように思われる。このことは『ベルツの日記』のここかしこに出てくる彼の医師、教育者としての考え、異文化への理解と行動からも十分に見て取れる。ベルツの医学は自然科学、研究ばかりでなく、患者を対象にした「アート」と「文化」の部分にも十分に配慮、考察がされている。ちなみにOxford Dictionaryは「Wissenschaft」を「The systematic pursuit of knowledge, learning, and scholarship (especially as contrasted with its application)」としている。これは洞察に富んだ解釈だ。

この「ベルツの講演」で、特に強調されるのは以下の部分で、今でも思い当たる厳しい指摘であると考える人も多いからこそ引用されるのだろう。

○「すなわち、わたくしの見るところでは、西洋の科学（Wissenschaft）の起源と本質に関して日本では、しばしば間違った見解が行われているように思われるのであります。」

○「西洋の科学の世界は決して機械ではなく、一つの有機体でありまして、その成長には他のすべての有機体と同様に一定の気候、一定の大気が必要なのであります。」

○「諸君! 諸君もまたここ30年の間にこの精神の所有者を多数、その仲間に持たれたのであります。西洋各国は諸君に教師を送ったのでありますが、これらの教師は熱心にこの精神を日本に植えつけ、これを日本国民自身のものたらしめようとしたのであります。」

○「しかし、かれらの使命はしばしば誤解されました。もともとかれらは科学の樹を育てる人たるべきであり、またそうなろうと思っていたのに、かれらは科学の果実を切り売りする人として取扱われたのでした。かれらは種をまき、その種から日本で科学の樹(der Baum der Wissenschaft) がひとりでに生えて大きくなれるようにしようとしたのであって、その樹たるや、正しく育てられた場合、絶えず新しい、しかもますます美しい実を結ぶものであるにもかかわらず、日本では今の科学の「成果」のみをかれらから受取ろうとしたのであります。この最新の成果をかれらから引継ぐだけで満足し、この成果をもたらした精神を学ぼうとしないのです。」

※（　　）内は講演のドイツ語の原文から、筆者註。

この日本在留25周年記念の講演は、このあと「最近でも良く聞かれる内容」で終わる。これらの指摘の背景には、明治維新から、日清戦争での勝利などを経て、日本が自信をつけてくると、今でもおなじみの「表」と「裏」、「内」と「外」、「本音と建前」など、ともすれば外国人たちに理解不能、通用しないことが起こりはじめることへの懸念もあったのかもしれない。ことがうまくいき始めると、つい自信過剰になり、うぬぼれ、独りよがりになりがちな、今でもよく見られる日本人の性向を感じさせる記載が出てくる。ところで、ベルツ来訪当初の医学生は勉強も熱心で、ドイツ語の読み書きもよくでき、ベルツを感動させた。

明治19年（1886年）に帝国大学令が発足すると、当然のことにベルツの弟子から教授が出始める。うれしいのだが、ベルツ自身は「教師」のまま、本稿で引用の『ベルツの日記』には出てこないが、いろいろと「変化」が起こり始めていた様子がうかがわれる。事実、明治33年（1900年）４月には「外人教師を取り扱うやり方が、次第に我慢できなくなって、翌年に予定される勤続25周年の記念祝賀会を断念して、大学を辞職するむね通告した、、」、そしてその後の大学の対応でも責任の所在のあいまいさ、などが記されている。約２週間後の日記に「、、大学とまたもや和解した、、」、となるのだ。今でも、日本のいたるところでよく見られる様子、つまり責任の所在の不可思議さなどが目に浮かんでくる。

5. 日本の科学、日本は特殊な国か？

ベルツの指摘した当時の日本人の「科学の精神」（これから以下は「学術の精神」としておく）批判は、ベルツが去ってから現在に至る100年余で「日本の文化」の中で、理解され、根を下ろしているのだろうか。日本の「学術研究」には、まだ近代

ベルツの「遺言」、日本に「学術の樹」を

西欧でルネッサンスを経て発展してきた「学術の精神」として、本当の意味では理解されていないのではないか、これが以下の問題提起である。これを丸山真男は「西洋のササラ文化」と「日本のたこつぼ文化」[8]と指摘する。

明治維新から150年、日本人の思考プロセス「マインド・セット」はそれほど変わっていない。日本の社会構造・制度・組織の「形」は近代西欧に似せても、「運用の思想」の「マインド」は「タテ」であり「ヨコ」[9]には広がらない。明治維新からの奇跡の成長と、日清・日露戦争から日中戦争[10]、第二次大戦と壊滅的敗戦[11]、戦後の「奇跡」(冷戦の枠組みと日米同盟等)の成長、官僚の「無謬性」、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」など[12][13]といわれてうぬぼれる。不思議なことに、この10～20年はメディアでも「公僕」と言う言葉はほとんど見なくなった。

戦後約70年弱で世界史に残る福島原発大事故(「第２の敗戦」ともいわれる)、この「歴史的」大災害は「人災」[6][14]だったのだ。責任ある立場の人たちは肝心な時にしばしばその責務を果たさない、責任もとらない、雰囲気で物事が決まる、最後には国民が犠牲となる。そして出てくるのが定番の「空気」[15]、「失敗の本質」[16]。「単線路線のエリート」[6]たちは失敗から学ばない、だから同じ過ちが繰り返される。

これまでの世界は、基本的にはグーテンベルグによる「情報の拡散」によって触発された西洋文明と西欧の科学の急速な発展に支えられた産業革命以来のパラダイム[17]で動いてきた、と思う。インターネットとデジタル技術の「幾何級数的な」進み方で、情報のひろがり、発信、アクセスなどが従来とはすっかり変わり、国家、金融、産業、大学などなど社会のありかたが大きく変わり始めている。「従来の権威」は終わりへと向かいつつ、世界が新しいパラダイム[18]へと急速に変わり始めている。

どの人にも、組織にも、国家にも、「得手と不得手」、「良さ・強さと弱さ」がある。これらは歴史的、文化的な背景もあり、社会の隅々にまで広がっていることが多い、だからそう簡単には変わらない。いわゆる「マインド・セット」とも言われるものである。さらに人間はついつい組織は「タテ割り」、「サイロ（silo）・マインド」[19]になるものだ。私たちは、自分たちの「良さ・強さ」を認識するのはやさしいが、「弱さ」を認識するのはえてして難しい。これからの世界では、自分たちの「良さ・強さ」と「弱さ」、さらに「サイロ・マインド」を認識していることは、大事な素養であり、知っておくべきコンセプトだ。これらの性質を自ら認識していることは、状況、場合によって、目的に沿ったより良いチームを作るのにも大事な要件なのだ。

6. これからの医学生、医師たちへ、ベルツの「遺言」

先の見えない大変化のグローバル時代、大学では英米系の大学が、世界を目指す意欲ある若者たちを引きつける。そこでの学部教育は何か。「文系・理系」などない。たとえば、米国エリート校の学部生が読まされる本のTop10はどんなものか[20]。これを授業の時までに読んでいないと議論にも参加できず、授業にも参加させないこともあるという。

それらは、プラトンの『国家』、ホッブスの『リヴァイアサン』、アリストテレスの『政治学』及び『倫理学』、マキアヴェリの『君主論』、マルクスの『共産党宣言』、トクヴィルの『アメリカの民主政治』、クーンの『科学革命の構造』、そしてハンチントンの『文明の衝突』など、なのである。

このリストで20世紀のものは『科学革命の構造』と『文明の衝突』程度なのだ（邦訳『文明の衝突』では著者による「日本語版への序分」[21]を読んでみよう）。これらが米国エリートの高等教育の基本にある。英国のエリート教育、例えばOxford大の学部生は「カレッジ」での伝統的なチュートリアル[22]が中心であり、毎週たくさんの本を「読み、考え、（紙に手で）書く」、そして議論する、日本とは全く違った高等教育だ。今や世界の高等

教育は公開されたシラバス、MOOCなどを使う、教師と学生が一緒に「学び合う場」へと大きく変わり始めている。

スペースも限られているので、ここからは医学関係者を中心に考えてみる。講座制などは医学部に限ったことではないが、医学部では以下のような特徴がある。卒業するとほとんどが国家試験を経て医師として社会活動する。しかし、ほとんどが博士号（大学の専権事項だ）を取得し、臨床医は専門医資格も取得する、などの他学部にはない特徴がある。しかも、学生の時から患者を診るという実践的教育、ベルツの強調する社会文化的側面もある。

この10数年、私の大学教育への懸念からの発言キーワードには、大学の「大相撲化」、「家元制」（私のウェッブサイト〈kiyoshikurokawa.com〉で「サーチ」する）などがあった。平成元年頃に始まった「大学院部局化」には教授の一人として反対していた。横並び陳情合戦になり、ますます狭い「タテ」割り、「タコツボ化」するのは見え見えだったからだ。しかし、役所の下請け国立大学ではこの流れは止められるはずもない。しかも、東大をトップとした旧帝国大学優遇制度になる。偏差値入試で選抜された医学生がさらに狭いタコツボ「家元制」に入る。「個人」として世界に「他流試合」に出ていくのは例外中の例外で、海外に出るのも教授の紹介で、２～３年で戻ってくる「紐付き」研究留学。先生も同じようなキャリアを引継ぎ、基礎系はともかく、臨床系でも研究中心で教授になった人たちが圧倒的に多い。

医学部でも大学院部局化となり、国立大学の内科、外科系では大きな医局制度は専門に分かれた縦割りに細分化され小粒になった。そして、教授を頂点にした、関連病院の人事もいれた、さらなる「小さなタコツボ」で教授の意向には逆らえない雰囲気が横溢している。若者が活発さを失っている。

大学院部局化の次は国立大学の法人化。交付金は徐々に減らされ、もともと手抜きだった教育はそっちのけで研究費の競争、しかもこれが東大を頂点とした旧帝国大学を中心に大型の研究費が配分される。若い人たちは教授の指揮のもと「手足」となり、診療し、研究し、論文を出す圧力ばかり。しかも多くが「時限」のポストだ。教授の下請けの細切れの論文が増え、多くは教授の業績になる。激変を始めている世界のなかで、新しい分野の研究は出にくい。なかなか独立できない。単に政府からの研究予算額の問題だけではないのだ。大学の制度そのものに問題がある、これは最近のデータではっきりと出始めている。

日本の医学部教育の評価は、欧米では高くない、成長するアジアでの評価も高いとは言えない。大学院などでの研究分野では、留学先の評価は高い。勤勉であるし、しかも多くは２～３年で帰国する、競争相手になる心配がない、基本的には優秀な研究助手の供給先との認識なのだ。

7．おわりに、そして若者たちへ

ベルツの「遺言」は、日本の高等教育の課題として残っている。多くの識者がベルツの「学術の樹」の講演を引用しているのはその証左だ。しかし、戦前の、そして戦後の大学も30年前までは、特に問題はなかったように見えたのかもしれない。政治・政府も、企業も、社会も、大学も、基本的に大学入試偏差値中心の社会で済んでいた。この20年、英米系の大学、そしていくつのもアジアの大学（その多くが英国の伝統を引き継いでおり、欧米の大学との関係を深めている）、また中国の大学の躍進が顕著だ。

私の独断と偏見から見れば、戦後の日本の大学教育は基本的に「知識・技術の伝達」、しかも猛勉強するでもなかった。特に戦後の教育で育った世代が大学ばかりでなく、政産官など社会の中核になるにしたがって、当然この影響が大きくなり、その傾向がどんどん進んだ。なにしろ「「ヨコ」には動けない」、が常識の「単線路線のエリート」、「年功序列」の「ヒエラルキー」社会で済んでいたのだ。自分で考え、行動する、人生で「賢い」選択をできる、という教育ではなかった。これが英米

の高等教育の精神、そしてエリート大学でうける教育との大きな違いだ。

これが、わたしが本文のはじめにチャーチルの言葉を引用した理由だ。日本でもこのような思想、思考をもったリーダーが出てほしいと思うのは、私だけではあるまい。しかし、そのような政治家、官僚、企業人の「エリート」を輩出するのも、「エリート」大学の先生たちの一義的な責任であろう。しかし、このような思想と教育を受けた実体験のない人たちには、そのような教育の精神で学生、若者たちに接することができないのも事実なのだ。教育の本質は自分が受けた「実体験」と「感動」からくる恩返し[23]なのだから。

この私の懸念・見解には異論もあるだろう。今回、この原稿を書くにあたって、ベルツの「遺言」ともなる「記念すべき日の講演」の、上記に引用した部分のあとに続く「最近でも良く聞かれる内容」は、ここで私の言っていることに似ているので、私自身が驚いた次第だ。それは私の個人的な体験から来る、常日頃から無意識に発する若者たちへの思いであり、メッセージ[23]と同じだと感じるのだ。

参考文献

1. Wikipedia. エルヴィン・フォン・ベルツ. https://goo.gl/ydE4Ii（2017年4月25日）
2. トク・ベルツ（編）. 菅沼竜太郎（訳）. ベルツの日記（上・下）. 岩波文庫, 岩波書店, 1979
3. 黒川 清. 日本の科学と精神. 応用物理 83（5）：345（巻頭言）, 2014（https://goo.gl/VR5y9z）／ベルツ先生の教え. 黒川 清のブログ, https://goo.gl/PjWtWl, 2016
4. 永井良三. ベルツ賞50周年記念―ベルツ博士と日本の医学. 日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社 ベルツ賞事務局, 2014
5. 黒川 清. ペンシルベニア大学. 黒川 清のブログ, https://goo.gl/JKgiFv, 2015（ペンシルベニア大学法科大学院でのセミナーは https://goo.gl/61Nt3r）
6. 国会事故調. 東京電力福島原子力発電所事故調査委員会報告書. 国会 東京電力福島原子力発電所事故調査委員会, https://goo.gl/q2auW4, 2012
7. 黒川 清, 永井良三, モーリッツ・ベルツ. 日本の近代医学の父 エルヴィン・ベルツ来日140周年― 学術の樹”としての医学を. 週刊医学界新聞 3200: 1−3, 2016（https://goo.gl/C5m0gU）
8. 丸山真男. 日本の思想. 岩波新書, 岩波書店, 1961
9. 中根千枝. タテ社会の人間関係. 講談社現代新書, 講談社, 1967／タテ社会の力学. 講談社現代新書, 講談社, 1978（講談社学術文庫, 講談社, 2009）
10. 猪木正道. 軍国日本の興亡―日清戦争から日中戦争へ. 中公新書, 中央公論社, 1995
11. 保阪正康, 半藤一利, J ダワー, などによる多くの著書.
12. E ヴォーゲル. ジャパン・アズ・ナンナンバー・ワン―アメリカへの教訓. TBS ブリタニカ, 1979
13. K ウォルフレン. 日本―権力構造の謎（上・下）. 早川書房, 1990, ほかの著書.／I ホール. 知の鎖国―外国人を排除する日本の知識人産業. 毎日新聞社, 1998／RT マーフィー. 日本―呪縛の構図：この国の過去、現在、そして未来（上・下）. 早川書房, 2015／池上英子. 名誉と順応―サムライ精神の歴史社会学. NTT 出版, 2000（原題：The Taming of the Samurai, 1995）, など.
14. 黒川 清. 規制の虜―グループシンクが日本を滅ぼす. 講談社, 2016／D ピリング. 日本―喪失と再起の物語：黒船、敗戦、そして3・11（上・下）. 早川書房, 2014, など, 多くの著書.
15. 山本七平.「空気」の研究. 文藝春秋, 1977（文春文庫, 文藝春秋, 1983）
16. 戸部良一, 他. 失敗の本質―日本軍の組織論的研究. ダイヤモンド社, 1984（中公文庫, 中央公論社, 1991）
17. J ダイアモンド. 銃・病原菌・鉄―1万3000年にわたる人類史の謎（上・下）. 草思社, 2000／文明崩壊―滅亡と存続の命運を分けるもの（上・下）. 草思社, 2005, など.
18. 広井良典. ポスト資本主義―科学・人間・社会の未来. 岩波新書, 岩波書店, 2015／水野和夫の著書.／M ナイム. 権力の終焉. 日経BP社, 2015／J Ito & J Howe. Whiplash: How to Survive Our Faster Future. Grand Central Publishing, New York, 2016, など.
19. G テット. サイロ・エフェクト―高度専門化社会の罠. 文藝春秋, 2016
20. 米国のトップ大学の学部生が読まされる本のリスト https://goo.gl/dRQb0a
21. S ハンチントン. 文明の衝突. 集英社, 1998（そして特に邦訳版の著者による「日本語版への序文」）
22. 苅谷剛彦. グローバル化時代の大学論2―イギリスの大学・ニッポンの大学. 中公新書ラクレ, 中央公論新社, 2012
23. 黒川 清のブログサイト〈kiyoshikurokawa.com〉から（例えば, 2013年度 東京大学入学式祝辞 https://goo.gl/87ZTXQ／Epistle 医師インタビュー企画「黒川清は、いったい何者なのか。」https://goo.gl/Nv5sfz／日本経済新聞「人間発見」シリーズ：「「出る杭」が日本を変える」 https://goo.gl/oBuZNi）／Shaping Post−MillennialLeaders in a Changing World https://goo.gl/Spo6nt／黒川 清, 石倉洋子. 世界級キャリアのつくり方. 東洋経済新報社, 2006, など.

謝辞：本稿で引用していないが、天野郁夫、潮木守一、苅谷剛彦、立花隆、橘木俊詔、保阪正康、山内太地（五十音順）などの著書も参考にした。